

歴史・文化を軸にした東京の魅力発信
に係る懇談会（第1回）

—議事録—

日時：令和4年11月4日(金)15時16分～16時24分
場所：東京都庁第一本庁舎7階中会議室

【事務局】

ただ今より、第1回「歴史・文化を軸にした東京の魅力発信に係る懇談会」を開催いたします。本日は、皆様ご多忙のところお集まりいただきまして誠にありがとうございます。会議の事務局として進行役を務めさせていただきます政策企画局政策担当部長の小高と申します。よろしく願いいたします。着座させていただきます。

はじめに、会議の公開についてご説明いたします。本日の会議は、冒頭から終了まで報道機関の皆様に公開で行います。また、本日の懇談会の様子は都のホームページ上でインターネット中継により配信しております。

続きまして、委員の皆様を、資料1出席名簿の順にご紹介させていただきます。

東京学芸大学名誉教授、大石学委員、

日本放送協会メディア総局編成センターチーフリード、土屋勝裕委員、

城郭ライター・編集者、萩原さちこ委員、

タレント、山崎怜奈委員。

なお、市原えつこ委員、デービッド・アトキンソン委員及びブルース・マリー・ジャーマン委員につきましては、本日、残念ながらご都合つかずご欠席でございます。

本日は、以上4名の委員の方にご出席いただき、会議を進めてまいります。よろしく願い申し上げます。

それでは開会にあたりまして小池知事より挨拶申し上げます。知事お願いいたします。

【知事】

皆様、こんにちは。今日はお忙しいところ東京都庁にお集まりいただきまして誠にありがとうございます。東京都知事小池百合子でございます。

本日は、「歴史・文化を軸にした東京の魅力発信に係る懇談会」ご出席を賜りまして誠にありがとうございます。この少し前、実は、記者会見をいたしておりました。定例のものでございますけれども、今回、東京都が、いわゆる“鮎”、持続可能な成長を続けるために、いろいろなハイテクを駆使する、そして新しい企業を育てていくなどなど、いくつもの課題、特に最近はですね、環境や防災、金融など、多くの課題がございますが、それを、しっかりと東京から発信をし、また、東京にいろんな方に集まっていただくということで、ハイ

テクと、それからサステナビリティを合わせますと“SUS”サステナビリティ、SUS と high-tech を合わせるとなんと鮎になるんですね。ということで、今後展開するプロジェクトを包括的に、この鮎というところにまとめまして、まさに握っていきこうじゃないか、ということで、東京都知事がそんなこと言ってびっくりします？よかった。お鮎の鮎ネタと、こうやって握るといいでしょうか、将来の東京を握っていききたいという、そういう意味を込めております。そして江戸の文化というのは、本当に先生方おられますけれども優れた文化で、まさにサステナブルだったわけですね。地産地消であったり、その温暖化対策としての打ち水もそうですし、様々な文化が凝縮されて今こそ江戸の文化を学んでいく必要もあるかと思えます。

ぜひ、そのことなども単に東京「美味しいお店があります」「こんな寺社仏閣があります」というだけでなく、そういうストーリーも展開させていきたいと考えております。東京には、まだまだ知られていない魅力が山ほどあると思うので、お宝発掘ではありませんけれども、皆さんとともに、東京のそして江戸の文化をですね、ぜひとも、もう一度掘り出して、そして磨いていきたいと思っておりますのでどうぞよろしくお願い申し上げます。ありがとうございます。

【事務局】

大変申し訳ございませんが、知事は公務の都合によりこちらで失礼させていただきます。

【知事】

何かお鮎のことだけ言って、帰るみたいな…。おわかりいただけたと思います。よろしく願いいたします。のれんもかっこいいですね。大好き。ありがとうございます。お世話になります。

【事務局】

それでは引き続き懇談会を続けさせていただきます。本日の会議は、ペーパーレスで行います。表示の操作は担当の者が行いますので皆様におかれましてはタブレットをご覧いただくと幸いです。また、ご発言いただく際は、お手元のマイクのスイッチを入れてからお話ください。お話終わりましたら再度スイッチを戻していただきますようよろしくお願い申し上げます。

次に、会議の座長の選任についてでございます。皆様方に事前にご相談させていただきました通り、大石学委員に座長をお願いしたいと思っておりますが、よろ

しいでしょうか。（各委員、首肯後）ありがとうございます。

それでは、大石委員に座長をお願いしたいと存じます。大石座長、ご就任のご挨拶と今後の会議の進行につきましてよろしく願いいたします。

【大石座長】

ただいま、座長を拝命した大石です。江戸の魅力や英知について幅広く皆様、それぞれのご知見を伺えればと思います。よろしく願いいたします。

【事務局】

では、まず事務局から、東京都の取組について説明をさせていただきます。モニターをご覧ください。お手元のタブレットでも結構でございます。

知事が先ほどご挨拶申し上げました「SusHi Tech Tokyo」について、本日の記者会見資料をもとに説明いたします。

東京は、都市間競争激しい中「High Technology」を活用しサステナビリティ、持続可能な新しい価値を創出することで世界を牽引してまいります。今後、展開するプロジェクトを包括的に推進するため頭文字を取り「SusHi Tech Tokyo」を共通コンセプトといたしました。この1ブランドのもと、来年の2月から第一弾として国際会議などを同時開催いたします。また、第一弾に記載してございます「歴史・文化を軸にした東京の魅力発信」に関して、本懇談会を本日、開催させていただいているところです。また、来年でございますが、リアル空間とバーチャル空間の双方で、過去から現在、未来の東京、体感できるデジタルコンテンツを楽しんでいただく機会を提供してまいります。そして、2024年度には集大成として東京ベイ eSG プロジェクトとして持続可能な都市像を世界に発信する大規模イベントを湾岸部で開催する予定でございます。

次に、改めて、この懇談会の目的と今後の予定等についてご説明いたします。まず目的は、「江戸東京の魅力には why 理由がある」その発掘と発信です。江戸東京の魅力の理由や背景、ストーリーを探り、発信してまいりたいと思います。懇談会では、観光資源として魅力的な素材の例などについて、有識者の皆様に、その議論を通じて私どもでは見出せない、新たな魅力の切り口や素材の発掘、創造を語っていただきたいと存じます。そして新たに発掘された魅力をデジタルプロモーションに活用するなどインバウンドに繋がる効果的な発信方法についても今後ご議論いただきたいと存じます。当面の予定でございますが、魅力発信の意見交換を本日第1回、そして年明けに2回目を予定してございます。2月から3月には、その魅力の発信に向けた意見交換を開催したいと思っ

ております。

また今後は冒頭でご説明しました「SusHi Tech Tokyo」の展開の中でも活用してまいり予定でございます。説明は以上でございます。

【大石座長】

ありがとうございます。それでは意見交換に入りたいと思いますが、本日は今ご説明にあったように第1回目で、今後第2回、第3回と続きますので、自由にご発言いただければ幸いです。途中で事務局からの説明も挟んで進めたいと思います。早速ですが、1人5分間程度で、それぞれにご関心のあることなどご意見をお聞かせください。土屋委員から、よろしく願いいたします。

【土屋委員】

よろしく願いします。私、今までNHKで大河ドラマだったり、時代劇だったり制作に関わってきたんですけども、江戸っていうとだいたい、日本橋が映ると、江戸だなんていうことがわかるという感じなんですけれども、実は東京は、水の都市なんです。 「橋」が地名に付いている場所も多いんですけども、家康が江戸を作ったときからですね、どう治水をしていくかってことが大事だったと思うんですね。橋が付く地名が多いということは、川も多かったということなのですが、日本橋あたりで川に行くツアーがあったりとかして、私も行ったことがあるんですけども、そうすると本当にいろんな橋を下からくぐって行くということで、いつもは、橋の上を歩いているのですが、下から見るとまた違った風景が見えてきます。そういう、水辺に注目していくと、また、東京の新たな魅力が見えてくるんじゃないかなというふうに思いますね。少し長くなるので、またあとに取っておきます。

【大石座長】

大丈夫です、いいですか？

【土屋委員】

ではもう一つ。サステナビリティということで言うと古着、リサイクルですよ。

これ今も、本当に吉祥寺とか下北沢とか原宿とか行くと、古着のリサイクルショップ等がたくさんありますが、江戸時代にも、そういう古着のリサイクルが盛んだったというのはあるかなと思います。

【大石座長】

ありがとうございます。それでは続きまして萩原委員、お願いいたします。

【萩原委員】

萩原です。よろしくお願いいたします。私は、お城に関する城郭ライター・編集者ということで、お城に関する執筆業を中心に講演をしたり講座をしたり、それから活用、活性化のアドバイザー業務など幅広く行っている者です。お城に関する仕事をしておりますので、今日は江戸城と関係するということでお声がけをいただいたと解釈しております。お城にちょっと偏った意見になるかと思えますけれども、一言で言いますと、今の東京という都市は江戸の上に成り立っています。江戸城があって、江戸城下町が発達して、それが今の東京の発展というところに直結しているわけですので、私としては、もう今も、江戸に生き続けているような、そんな感覚でおります。城というと、建物を連想する方が圧倒的に多いのですが、私は、城という場所というか地域、城を通してその日本の地域とか日本の文化とか、人々の営みとか、そういったものを見るのが好きなんです。好きというか仕事にしております。城というのは本当、社会の縮図だと思っていて、城を通してその時代の社会情勢も見えますし、人々の意識、そういったものも見えてくる。そういったものだと思っております。それは時代が変わっても城の姿が変わっても同じことだと思っております。

そういった中で全国のお城を見ていると江戸城はやはりちょっと特別な存在です。江戸城の話は長くなってしまうので割愛いたしますが、やはり、今の東京どころか、今の日本の社会体制ですとか価値感ですとか、そういったものはやはり江戸時代、江戸幕府が江戸城を築き、幕藩体制を整え、そこでできたものが明治維新後も受け継がれていると私は認識しております。やはり、その始まりというのが、この江戸の誕生というところになっていきますので、今回のテーマで私自身も改めて当たり前のように過ごしている江戸の中、そして江戸の価値観というものを私も改めて再発見できればと思っておりますし、日々、漠然と語り継がれなければならないと思っているような、未来に繋げていかなければならないなと思っているものを、実際どのようにすればよりよく繋げていけるかというところを私自身も勉強させていただければと思っております。

江戸城の、他のお城と違う面としては、やはり、一からこの江戸という都市が作られ江戸城が作られているところがまず大きな違いだと思います。それから数多ある城の中でやはり徳川幕府の拠点、本城であるという時点でも全く違いますし、その江戸城を中心に作られた都市というのは、やはり他の都市とはまったく異なるものだと思います。そこで、様々な文化というものが生まれて

いくわけですので、そういったところを一つ一つ洗い直してみると東京どころか日本の本質というかそういったところが浮き彫りになってくるのではないかなと思っています。日本人もなかなか当たり前のように見過ごしているような価値ですとか常識が、本当にたくさんあると思うのでそういったものをブラッシュアップして海外の方にお届けできるようになっていくといいのかなと思っています。城に偏った話になるかと思いますが、勉強させていただきたいと思います。よろしく願いいたします。

【大石座長】

はい。ありがとうございます。それでは、山崎委員お願いいたします。

【山崎委員】

はい。山崎怜奈と申します。本日はよろしくお願いいたします。普段はタレント活動をはじめ、あとは、東京 FM の方でお昼の1時から3時まで、平日は毎日、ラジオパーソナリティとして勤めております。そんな中で、メディアに関わることが本当に多くて、現在も東京国立博物館の方で開催されている国宝展の特別展示でNHKのハイビジョンのデジタル技術を駆使した展示の中で、ナビゲーターを務めさせていただいている等、歴史・文化に触れることが多いです。あとは、土屋委員が先ほどおっしゃっていた治水と水辺のまわりのことであったりとかは、私元々、江戸川区の出身で水辺がかなり近く、そういった自然豊かな地域、東京では、比較的そういった文化に触れやすい地域で育ってきているので、そういった意味でいうと地元ならではの視点でもお話できるかと思っています。ラジオであったりとか SNS であったりとか、情報を発信するところにかかなり近い距離感でいる身としては、より多くの文化・芸術をどのようにして伝えていけばいいか、その良さを伝えていけばいいかっていうのは、やはり若者に興味を持ってもらうことってというのが、すごく重要だと感じています。自身が関わらせていただいた、その国立博物館の展示にもかなり多くの方がお越しになり、かなり盛り上がっていて、なかなかチケットも取りづらい、みたいな状況を聞いているんですけど、私が伺ったときには、そういった最新鋭のデジタルコンテンツを駆使して、実際になかなか普段の展示では見れないような国宝の様子をランダムに映し出すことによって、ハイビジョンだからこそ、今の最新鋭のデジタル技術だからこそ、再現性を担保して体験を提供することによって、「昔からあるものだから自分たちとは関係ないかな」とか「もっと便利なものを追求していけばいいんじゃないか」というふうに、ちょっと排他

されやすいものに関しても、より重要なこととして受け止めることができると
思います。その興味をどれだけ引き出せるかっていうことにおいて、私自身、
未熟ではありますがけれども力になれたらなと思っています。勉強させていただ
きたいと思っていますのでどうぞよろしく願いいたします。

【大石座長】

ありがとうございました。最後に私の方から少しお話できればと思います。
江戸時代を研究していることから今日、江戸時代の見直しにどういう意義があ
るか、価値があるかという話をします。日本の場合、明治以降に近代化・産業
化が進められ、欧米に追いつき追い越せできたわけです。ですから、その前の
時代は、古い時代、封建社会とか封建時代と言われました。その封建制が克服
される過程が近代化であり、日本は欧米化したわけですが、その理想としてい
た欧米も今、環境や資源、核や戦争の問題、あるいは市場原理、競争原理によ
る格差の拡大など、非常に難しい状態になっている。はたして日本も同じよう
になるか、あるいは世界を主導して新しい道に目を向けさせることができるか、
問われているのだと思います。そうしてみると、今までは明治維新以後を近代
として、私たちが理解可能な時代、文明化した時代として評価し、それ以前の
江戸時代は不自由な不幸な時代だと考えられていました。しかし、江戸時代は、
その前の 100 年間の戦国時代、あえて言い換えると、人を殺せば殺すほど、人
の土地を奪えば奪うほど英雄になるような価値観のベクトルを 180 度変えて、
人を殺せば罪になるし人のものを奪えば犯罪者になるという、私達の理解可能
な社会になったのです。日本型の近代化が江戸の中に十分見られるのではない
か。外国に旅行に行ったとき、地域によっては何か物を落とすと戻ってこない
場合が多いが、日本の場合は結構戻ってくるという話を聞きますが、これは別
に、明治以降の日本の近代化の中で成立したわけではなく、江戸時代の日本人の
感性・行動様式や思想に基づくものなのです。これを日本の古い世界に閉じ込
めてしまうのではなく、もしかしたら世界の人にとっても物を落として戻って
くれば嬉しいことですから、江戸が持っていた価値や考え方を世界に発信して
いく時期ではないか。さらには戦国時代の価値観を変えて、250 年間平和を続
けたことも意義があります。江戸時代は、戦死者が 1 人もいない、世界でも稀
有な時代でした。江戸時代、外国人が日本に来て、ファーイースト、極東のさ
ぞ遅れた国だろう、文明を伝えてあげようと来日したら、リテラシーが高くみ
んなが字を読めて、礼儀正しい社会を見て驚いて、本国へ報告し、記録を残し

ている。同時代の第三者の目、外国人の目から見ても、かなり素敵な社会であったことを、私達はもっと知らなければいけないし、それをもっと世界に伝えなくてはならないと思います。もちろん、江戸時代固有のさまざまな問題、貧困とか差別などがないわけではないのですが、今まで明治以後の近代化によって全て解決できたように考えられがちでしたが、そうではないところをもう1回私達は認識することによって、今後の日本の社会、さらには世界に提起していく価値をもつ時代と思っています。さきほど、皆さんが言われた様々なこと、さらには日本全体の縮図だったり、首都機能を持っていたりする江戸に、全国各地から、また諸外国から人々が集まるといふ小さなグローバリズムが見えてきます。多様な人々を受け入れて発信していく、そのような役割を果たしていた。これを改めて、私達も再認識していく必要があると思います。

ですから、今回のこの東京都の懇談会の仕事は、東京が再生するだけでなく、日本さらには世界にとって大きい意味を持つ、その第一歩になるだろうと考えています。私の話は大きくなってしまいましたが、以上です。皆さん、ありがとうございました。

それではここで用意した資料について事務局より説明をお願いいたします。

【事務局】

事務局から説明させていただきます。まずその前に皆様方お手元のタブレットの右上にございます「非同期」を押しますと、ご自身でもページが表示できますので、資料を戻したい等ありましたら動かしてみてください。それでは説明いたします。

江戸の課題や英知を考える素材例として、私どもでまとめたものでございます。まずサステナビリティですが、電気やガスもない江戸ではどうやって生活していたのでしょうか。また、災害が相次ぐ中、どうやってその災害対応していたのでしょうか。そして、江戸のアイコン、シンボルです。江戸は全国からの憧れの街でした。「江戸といえば何」と当時の人は答えたのでしょうか。次は、食です。先ほどもお鮎などございましたが、日本の食文化を代表する鮎は、どうやって生まれたのかということを知りたい、と。また、安全・高度な技能ですが、大石先生が今おっしゃられましたようになぜ250年も60年も大きな争いのない世の中だったのでしょうか。こういった問いの答えや理由に、江戸の英知や魅力があるのではと考えています。

次に、江戸の文化の象徴となりますアイコン。様々なアイコン例をご覧いた

だきたいと思います。お手元のタブレットをご覧ください。歴史や文化の象徴となるアイコン素材です。歴史・文化とあとは近代から現代をけん引する例です。各自おめぐりください。東京の未来像のアイコン例です。また豊かな自然を象徴する例です。日本が誇る文化を示す例です。今も話題に挙がりました食のほか、文化やアート、同じく街や景観、そして世界の方々に人気のあるアニメやキャラクターといったもの、代表的な過去から現在の建造物、その中でも門を表示しています。次、お願いします。今もこの部屋の中にも飾っていますが、日本特有の代表的なのれんです。最後になりますが、江戸の日本橋を舞台に当時の人々の活気ある姿を紹介します。昔の方々にとっても何が魅力だったのかなど考えるきっかけになるものと思います。

以上です。

【大石座長】

ありがとうございます。それではただいまの説明も含めまして再び委員の皆様から、江戸の英知・魅力についてご意見をいただきたいと思います。二回目ということになります。最初にご発言したいという方がいらっしゃったら遠慮なくどうぞ。よろしいですか。

【土屋委員】

では、私の方から少し。先ほどの古着のリサイクルということで、ここにもあるサステナビリティ、資源のリサイクルだったんですけど、江戸時代、農家の人たちが糞尿や肥やしで取引して、排泄物までもリサイクルして、大名のそれは値段が高くて庶民のものは安かったとかですね、そういう話があるのですが、そのくらい徹底してリサイクルしていたというのは、とてもおもしろいなと思いますね。

【大石座長】

江戸時代以前の中世、戦国までは、武士と農民が未分離で、いざ鎌倉というときは普段農業をしていた人たちが、騎馬1人を中心に、一族郎党が周囲をかためて鎌倉なり戦場に向かいます。戦が終われば帰りまた農業を営む。こうした形態では、長期戦・持久戦ができない、農業の片手間ですから。だから、早く兵農分離をした大名が強い軍隊を作り、他方農村は安定的に兵糧、食料を調達できる領国体制が作れます。それを早く達成したのが、信長なり、秀吉なり家康であって、兵農分離をともないつつ全国統一されてくるわけです。城下町は、兵が集まる場所でありプロフェッショナルの軍団です。その人たちは農業

から離れており、食料調達はできません。他方、米や野菜などの食料を調達しなければならぬ。ここに農業と都市の関係ができ上がってくる。江戸が元禄時代に 100 万都市になると、ここに日々食べ物を供給するのは大変なことになるわけで、江戸周辺の農村が活発に野菜作りをしていくわけですね。その中で練馬大根や茗荷谷の茗荷、小松川の小松菜などの特産物、ブランド品ができます。一番の画期になるのが享保改革という吉宗の改革です。今の中央線沿線は大岡越前守が、町奉行でありながら地方御用（じかたごよう）という形で新田開発の責任者として開発します。さきほど土屋さんが言われたように、武蔵野地域は当時、地質に劣り関東ローム層で水持ちが悪く養分が少ないため、人糞を江戸から購入して肥料として野菜を作る。水が少ない畑作地帯ですが、そこから野菜を日々江戸に供給する。江戸と武蔵野にサイクルができ上がるわけですね。こうした意味で、私は都知事の最初は大岡越前だと言っています。東京が西に向かって発展しているのは、おそらくこうした歴史的前提が大きく影響しているのではないかと考えています。東は隅田川、荒川、中川、江戸川、利根川等の川が流れており、なかなか交通路が確保できないのに比べて、中央線などを見ると分かりますが、多摩川の上流は川幅が狭くなっており簡単に渡れます。野菜や薪炭などを馬で運ぶことも簡単にできます。こういう形で日々江戸市中と多摩地域との交流があり、そういうサイクルを大岡越前が最初に築くのです。江戸前期、上方から醤油やお酒などさまざまな「下り物」と、関東地廻りの「下らぬ物」とは品質に差があったのが、江戸後期品質の格差が縮まり、江戸・関東ブランドが売れるようになる。このように江戸の発展を見ると、江戸が独立した安定性を持つストーリーが見えてくると思います。そういう意味で、江戸とその周辺同質化、共存化の視点というのも、やはり重要だと思います。すみません、長くなりました。

【土屋委員】

ありがとうございます。もう一つ、古着にこだわるのですが、そこから紐解いていきたい。最初に古着屋を始めたのが鳶沢甚内（とびさわじんない）さん。鳶沢甚内さんは、江戸初期に江戸市中を荒らし回っていた盗賊なんですけれども、御用になったときに「盗賊を逮捕しても根絶やしにはできない、むしろなんとか食えるようにしてやった方がよい」ということを幕府に進言するんですよ。その幕府は鳶沢甚内に吉原付近の土地を払い下げて、今そこ、鳶沢じゃなくて「富沢」になっているのですが。そこで古着屋を出させて、要するに、

そこから古着を扱う許可を与えてやっていくのですけれども、そういう食うに困った人たちにちゃんと仕事を与えて、きちんと経済の中に入れていくことで、困窮させない。

もう一つ、すみません。時代劇で必ずエキストラとして出てくる、それが出てくると何となく江戸だなと感じるのが棒手振（ぼてふり）。棒手振は、こういう棒の先に桶をつけて物を売っている人々なのですけれども、棒手振もどういふ人たちがやっていたかというところ、15歳以下の年少者や身体障害者でも希望する人がいれば。あるいは50歳以上の高齢者ということで、幕府は、弱者の職業として棒手振を考えていたようです。きちんとしたお店があればいいのですけれども、そうではない人たちにも、きちんと職業として棒手振を認めていたということです。塩や味噌、豆腐、こんにゃく、お餅などを売っていて、それが江戸北部だけで5,900人いたというのですね。そのくらい弱者に優しいというのか、ちゃんとそういう社会の仕組みを整えていた。争いは何から生まれるのかというところ、奪い合いということだと思ふんですよね。だからそういうところにきちんと配慮した政策を幕府はやっていたのだなということは、改めて、江戸の魅力なのかなと思っています。

【大石座長】

そうですね、競争原理・市場原理だけではなく人々が共生できるような方向が目指されていたこともあったと思います。火付盗賊改役の長谷川平蔵が、石川島人足寄場を作るのですが、これは社会の不安要因になる無宿者を捕らえ、生産手段あるいは生活手段として手に技術を与えて社会復帰させる施設です。恵まれない弱者に対する幕府の配慮は、こうした施策にも見えてきます。小石川養生所も、身寄りのない貧しい病人を無料で入院させて治療します。こうした福祉政策も見逃してはいけないと思います。ありがとうございました。それでは、いかがでしょうか。萩原委員、お願いします。

【萩原委員】

少し議題が変わりますけれども、思ったことをお話しさせていただこうと思います。例えば食ですとか、伝統工芸ですとか、そういった形あるもの、これを掘り下げてどう発信していくかというところも、この会の大きな議題にはなってくると思うのですが、私はまず、都民の皆さん、日本の皆さん、そして東京を訪れる海外の全ての方に、まず、この江戸に立っているっていうところを体感していただきたいなと思っています。それが実は、そんなに難しいことでは

ない、今の東京が持っているポテンシャルだと感じています。東京は、もう都市化されていて、江戸時代のものとか、更に言えば中世のものとか、そういったものが全く残っていないように思われているのですが、実は私も全国のお城や城下町などを見ていて、東京って意外と骨組みがそのまま残っている都市だなと感じます。それは、ビル等の上物がたくさん建ってはいるのですが、根本的な土台があまり破壊されていないと感じているからです。

例えば、先ほど土屋さんがおっしゃられました日本橋から船に乗ってというあのコース、江戸城の外堀のコースですよ。私も好きで乗ったりしますが、結構感じるがあります。例えば、電車で移動するより水運の方が早く東京の東に行けるんだとか、そういった水運のベースですとか、江戸城、江戸を守る効率的な堀というものがよく残っているとかです。

それから、前々回の昭和の東京オリンピックのときも外堀の上に高速道路を立てるような形ですから、基本的にそういった堀も残っていて、全国的にも、内堀は結構残っていても、中堀や外堀まで残っている城下町は実はそんなにないんですね。そういった中でもかなり広範囲に、よく残っているということは言えると思いますし、JR 中央線・総武線の御茶ノ水駅あたりから市ヶ谷、水道橋、四ツ谷駅あたりというのも外堀の名残ですし、それぞれの駅の脇に「見附」と呼ばれる外堀に置かれた城門の跡、その土台の石垣がよく残っていて、そういったパーツ自体も残っていると思うんですね。そういった、想像力を持たないと全体像は分からないけれども、そこを想像するための景観や片鱗、土台、そういったものはものすごくよく残っている。これをステップアップさせて、イメージですけれども現代の技術で、その上に何かビジュアル的に見せてくれるようなものとか、そういった展開というのは実に江戸らしい東京らしい展開だとも思いますし、やはり、もう全てを上物で見せるのではなくて、土台の上に見せていくといったところが可能な都市だと考えています。それをすれば江戸のすごさ、例えば先ほどご紹介をした四ツ谷駅、水道橋駅、飯田橋駅の脇にある城門の土台の石垣、私が見ると立派なものだな大きくなってというのが分かるんですが、やはり一般の人には分からない。でも面白いのは、聞くと皆さん結構知ってる。「あの駅の脇にある謎の石垣でしょ」と、結構知っていらっしゃるんですね。その上にいかに大きなものが作られていたのか、そして、それが江戸城を中心とする江戸の外側である外堀の一つの城門にしか過ぎないこの凄さ、スケールの大きさというものを伝える、一つのヒントになるんじゃない

かなと思っています。私も、江戸城であったり城下町であったりを、講座ですとかそういったものでこう解説して案内することも結構あるんですが、あと一歩、二歩の想像力を助けるものがあれば、皆さん、なんとなく普段の生活の中で土台を知っているの、ふわっとイメージが膨らむ。そういった想像力がすごく楽しめる街でもあると思うんですね。何かそういうことができないかなと思っています。

それから、以前、だいぶ前ですけれども、フランスから来た知り合いに、江戸城と城下のあたりを少し案内したときに「パリと一緒にだね」という感想をいただいて私はちょっと意外な感じがしました。外国の、特に欧米の方というのは城の概念が日本と違うので、やはり「どこに住んでるの？」となります。ヨーロッパの城は、宮殿のような住まいのような位置づけなので、欧米の方は、軍事施設、政庁としての日本の城をなかなか理解しにくいことがあるのですが、「城を中心とした都市」というお話をしたときにすごく共感を得られた、という私にとって発見がありました。そういった意味では、江戸の街をひとつの都市として、ご自分の都市と比較していただくような何かそういう手助けというのも、より、ご旅行を楽しんでいただける、そして、深く知っていただける、本質に近づいていただける道筋になるんじゃないかなと思っています。ですから景観ですとか、それから、町の名前、例えば人形町ですとか、そういったものも残っていますし、それから、食文化ですとか祭りですとか、伝統芸能ですね、そういったものに通じる観光資源があると思います。江戸時代に一度タイムスリップしていただいて、そこから江戸庶民になったつもりで当たり前のように、そういったコンテンツをより楽しんでいただけるというのが一番の道筋かなと思っていますし、それは、私たち都民、それから日本国民も必要な観点ではないかなと思っています。すみません、長くなりました。以上です。

【大石座長】

はい、ありがとうございます。そうですね、確かに今の東京に江戸を復元するといったときに、地名や景観や道路など基本形はもうできてますね。また、ありがたいのは、文書や絵図、紀行文などの歴史的作品が多く残っているので、それらを対応させて見ていくと理解しやすく納得できる。江戸の言葉も私たちは読めるし、理解できますから。そうしてみると、私達の生活が、明治維新を超えて江戸と直接に繋がるさまざまなことが、よく分かる思います。はい、ありがとうございます。

【萩原委員】

ありがとうございます。

【大石座長】

それでは山崎委員お願いいたします。

【山崎委員】

皆様のお話を聞かせていただいている中で、やはり、この江戸の街並みが分かるようなものがまだ残っているというところと言うと、東京に住み東京に生まれた者として、かなり街歩きを多くしてきた中で、その街の坂の名前の由来であったりだとか、どんな偉人が住んでいた遺構なのかとか、あとは、市ヶ谷や四ツ谷の駅には、江戸城をはじめとするその城下町の街並みの復元の模型があったりだとか、説明文が書かれていたりとか、そういうところで人と待ち合わせしているついでに見てしまうといったような、何かそういうものが多く設置されていると思うので、東京であったり江戸の街並みの楽しみ方であったり魅力が分かるようなものが、今のままでも十分、すごくたくさん設置されているのは、東京都をはじめとする自治体の方々のお力だと思うのですけれども、一つ踏み込んだところで、より多くの方々に興味を持っていただいたり、観光客の方や若者にもアプローチしたいというところと言うと、以前、東京国立博物館に伺ったときにもありましたが、日本橋の辺りを歩いていたときに江戸から明治に繋がっていく多くの遺構が残っていく、その大部分をまとめて統括して知れるものとして、謎解きのイベント、街歩きのイベントを多く開いているのを目にしました。それは謎を解いていくことによって街歩きをしながら、じゃあ次のスポットはどこだと言って、神社にたどり着きました、その神社のゆかりのものを知って、そこに置かれている看板を読んでいくと、そのお題として出された謎のヒントが書いてある、みたいなことを解いていくによって、発見やひらめきの面白さとともに、新たに知識をどんどん得ていくっていうことは、机上の勉強、教科書や資料集を読むみたいな勉強よりも、得られるものとか発見が多いと思っています。自分で学びに行く、足を運ぶことによって、行ったんだよということを人にまた喋りたくなるし、写真を撮ったりだとかして広めたいということ、若い世代もそうですし、そこと繋がりが密接にあるような観光客の方、若い観光客の方とのコミュニケーションが取れる世代とか、そういった職種に就いている方にも広めやすいということなのかなと思っています。気になったのは、日本語表記が主なので、そこにどう言語を入れていく

か取り入れていくかということもそうですし、音声ガイドを美術館や博物館に行ったときに私はよく借りるんですけど、何かそういう解説を QR コードで読み取るなりして流して聞いてということを経験できたら、坂の由来等も含めてより一層楽しんでいただけるのかなと思います。日本に住んでいる方は、知っていることが多いかもしれないし、当たり前そこに存在しているからその地形がどんなに特殊でとか、どういう地名が付いているのか、そういうのってあまり考えたことがなかったりすると思うんですけど、東京の中でも谷であったりとか、あとはちょっと丘みたいになってる地域であったりとか、永田町の部分とかも結構特殊な地域だと思うんですけど、何かそういうところに近寄りたみたい印象もあったりするんで、そういったことを楽しむような企画プロジェクトを通して、より身近に感じてもらうことができればいいのかなと思いました。

一方、少し戻ってしまうんですけども、手元にある資料の中で、町民の人々の暮らしを描いたものを多くいただいているんですけども、他にも昔って「職人尽絵」と呼ばれているような、いわゆる職人さんや職業が 38 とか 40 とかぐらいある姿を描いたものであったりとか、『日本永代蔵』や『世間胸算用』のように町人文化を描いたものが今も多く伝わっていると思うんですけど、ぱっと見たときに何が書かれているか、本当に分からないことが多いので、具体的にこれは何を指しているんですとか、今はあまり知られていないけれど、こういう職人がいたおかげで今の文化が残っているんですとか、そういう説明をより柔らかく伝える術が何かあったらいいなと思っています。ありがとうございます。

【大石座長】

ありがとうございました。確かに文化財に関して、最近では、自治体が熱を入れていて、今、東京都が中心となり文化財ウィークを展開していますが、各地の博物館では、さまざまな展示や講演会、講座、イベントが行われています。これらは、市民が主体的に江戸文化や歴史を体験、経験する機会になると思いつつ聞いていました。

同時に、なかなか難しいところですが、グローバル化への対応として、来日外国人に対して江戸の文化・歴史をどのように表現していくか、どのような場所や文化財を見てもらうか、これはまた新しい課題として、今後取り組んでいくべきだと思います。

例えば、先ほどの土屋さんの話にもありましたが、近代化の過程で、前近代的なものを、ともすると古い、不衛生などと切り捨ててしまったものが、実は重要な価値を持っているということがいっぱいあると思います。そういう視点から、先ほどの糞尿を含めて、あらためて意義・役割を考えてみる必要があると思います。また、江戸時代について、従来身分制度の厳しさが強調されてきましたが、身分は家にかかわったもので、農家の二男三男は江戸へ出ると、長屋に入り町人になるわけです。町人もお金を貯めて武士身分を買ったり、武家を継ぐのが嫌な場合、あるいは二男三男の場合など、芸術家や作家、あるいは町人になるなどフレキシブルな部分もあったわけです。身分制度・家制度を固定的に考えると江戸の柔軟性は見えてこないと思います。江戸に来たさまざまな人々が転業・起業する、江戸はそうした新しい可能性を有し、その面白さを江戸のダイナミズムとして捕えていく必要があると思います。そうした部分を世界に発信していく必要がありますね。ありがとうございます。

【大石座長】

さて、かなりたくさんのお意見が出たんですが、事務局からジャーマン委員のご意見をご紹介いただけるものでしょうか。

【事務局】

それでは、本日ご欠席のルース・マリー・ジャーマン委員から以前いただいたご意見を紹介させていただきます。3点ほどございます。

まず江戸の英知や魅力をアピールするターゲットを選定することが大切ですね、というお話がございました。

2点目ですが、個々の江戸東京の魅力の裏側にあるストーリーを分かりやすく説明することが必要ですね、ということです。観光した際、例えば外国の方が実際に目にすることができる現在の東京にある風景や光景を、江戸から後へと結びつけながら、その未来図をストーリーとして説明するというのが分かりやすいのではないのでしょうか。

さらに東京には、食や自然の魅力があります。外国の人にとっては、なぜ東京はミシュランの星獲得数が世界1位なのか、なぜ東京は大都市なのに水道水が飲めるのか、なぜ東京は綺麗、清潔なのか、といった不思議でならないというところを掘り下げるのはどうでしょうか、というご意見でございました。以上です。

【大石座長】

ありがとうございます。ターゲットの問題ですね。それからストーリー性の問題についてご意見いただいています。そろそろ時間も近づいてきたので、今日、言い足りなかったこと、あるいは、今のジャーマン委員の意見などを踏まえて、ストーリー、ターゲットあるいは食文化などに関わること、それ以外でも、土屋さんから、また、お願いできますでしょうか。

【土屋委員】

はい、ストーリーということですので、ちょっと無理やり強引にサステナビリティとかに絡めようとしているんですけども。やはり安全というか、災害に強い街を作ってきたと思うんですね。お城のことで言うと、明暦の大火で、江戸城の天守が焼けた後、どう復興するかといったときに天守は作らずに、街の復興だったり、両国橋を架けたりとして、そのあと明治に入って、関東大震災のときに結局また木の橋は焼けてしまうので、今度は復興橋を鉄で作ってと、そういうふうに災害と闘っていく中で東京の風景はできてきたんじゃないかなというところがあって。

例えば、上野の広小路なんかも、要するに火事が燃え移らないように道幅を広く取ってということで広小路となって、そうするとそこには建物は建てられないけれども移動式のものであれば大丈夫ということで、そこに屋台が出てきて、そこに逆に広場ができて賑わっていったみたいなことで、災害対策で道を広くしたんだけど、逆にそこが文化の発信地になっていった、みたいなこともあったりして。

災害は、まあ悲惨なことで大変なことなんだけれど、そこから復興してくる中で、江戸庶民の活力やパワーが感じられるというようなストーリーはどうかかなと思ったりしますね。

【大石座長】

災害から立ち上がる強さを持った都市だということですね。それが文化の発信地として成長する魅力、とても重要だと思います。ありがとうございます。萩原委員どうでしょうか。

【萩原委員】

ターゲットの問題ですとか、そのストーリーの設定というのは、かなり多岐に渡ってしまうので、整理や選定がかなり難しいだろうなと思います。ただ日本国内で東京以外のところに行ったときもそうですし、海外に行ったときもそうですし、居心地がいい場所というのは、その土地の人が誇りを持っていると

ころだと私はいつも思っているんですね。言い切ることではないかもしれませんが、日本人であったりとか東京都民が、自分たちの地域にすごく誇りを持っているか、自分の土地を知っているか文化を知っているかというところ、やはり少し低いのではないかなと、私は感じています。ですので、外国の方が日本を知っていただくアイコンを作っていく、磨いていく、そういったことも大事なんですけれども、やはり本来は都民であったり日本国民であったりがその価値を認識して誇りに思うような道筋、これが一番大事だなと私は思っています。やはり興味とか好みとか、感覚が日本人と海外の方とでは違うので、コンテンツにするときは、少し考え方の違いが必要だとは思っているんですね。お鮎を当たり前前に食べている人と食べたことがない海外の方とでは出し方、提供の仕方、ストーリーの作り方は当然変わってきますし、外国人の好みとか、そういったところになってくると思うのですが、大事なものは、本質的な価値というところを都民、そして全国民が理解し誇りに思っていく。そういった中で、海外の方におもてなしという意味、誇りを紹介するという意味でのストーリー作り、テーマ作りといったところが、重要になってくるのではないかなと思います。なので、いろいろなものが本当に奥深く江戸にはありますけれども、そういったものを一つ一つ丁寧に扱っていくことは、とても大事なんじゃないかなと思います。それは、重くて、こうじゃなきゃいけないとか、決してそういうことではなくて、本質を大事にしていくことは大事かなと感じました。ありがとうございます。

【大石座長】

ありがとうございます。そうですね。意識や誇り、住みやすさ、そうした部分をうまく私達が共有できればいいし、それを外国人や世界に伝えられればいい。江戸の人が江戸を好きだったというような部分ですね、ありがとうございます。山崎委員いかがでしょうか。

【山崎委員】

はい、お二方のお話を大変興味深く聞かせていただいていた中で、大学時代に、慶應義塾大学で防災学を教えている大木聖子教授という方がいらっしゃいまして、その大木教授が、子供、大学生よりももっと小さいお子さん方への教育の一環として、防災小説という教材を作っていたんですね。その防災小説っていうのは何かっていうと、実際に首都直下型の大きな地震が発生したときに、自分自身がそれにあったときにどうなってしまうのか、どういう行動をとるの

かみたいなことを子どもたち自身が想像して 800 字ぐらいの短い小説にして描いていくという、教育の一環としてそういった教材を作っている方がいらっしゃるしまして、そういうふうに関心する身近なこととして考えるということであると物語を作っていくのは、文学的なことではなくても、まず、もう少しかみ砕いたところから始めてもいいのかなとも思います。

あとは個人的なことと言うと、歴史であったりとか、そういった街の中にある文化、あとは地元江戸川区では、江戸切子だったりとか、藍物、染物の工場等、古くから残っているところもまだあるので、そういったところで育ったからこそ、私は興味を持って大人になってからも学んでいったりとかできるものの、触れてこなかったというのは割と大きいのかな。触れてくるかこなかったか、というのはとても大きいのかなと思って。

だから、自分自身は元々興味あったものもありつつ、同世代であったりとか、そういった方々に対して、まだ興味を持ってないとか、外に目を向けすぎて自分たちの足元にある大事な豊かさっていうものに、なかなか気づけないとかということに対して、どういうふうに関心を広げていけばいいかっていうのを今後も考えて勉強していきたいなと思っています。

【大石座長】

はい、ありがとうございます。そうですね、どのように表現し伝えていくか、子供たちを含めて未来の人たちにどう残していくか、大きい課題だろうと思います。ありがとうございます。

私も意識の部分について少し述べるならば、江戸時代を通してみると、前期において文化は京都、経済は大阪とされ、江戸は後発のフロンティアでゼロから始まる場所があるため、京坂、特に京都に対するコンプレックスが強くなりました。そこから始まる面白さがまずあると思います。太田道灌の館を、巨大な江戸城まで発展させるわけです。その前期の元禄時代は西鶴や近松など文化は京都大坂中心です。江戸文化が成長し、上方に追いつき交差し逆転するのは、おおよそ宝暦・天明という田沼時代の 18 世紀の後半です。田沼時代頃に、「大江戸」や「江戸っ子」という言葉が生まれてきます。そこには上方に対する自負心・自立心が見られます。こののち、江戸の人に合う濃口の醤油などが生み出されます。江戸地回りの油なども関東各地で菜種栽培を奨励し増産します。上方が先行して元禄くらいから庶民が光、灯、暖を十分取れるようになり、夜の生活が長くなり 3 食が普及します。江戸も同様でしたが、田沼時代以降、

江戸地回りの物資・物品が豊富なり、生活が多様化・安定化します。田沼時代の経済発展、文化の発展は江戸を中心にします。さらに文化文政には、ほぼ完全に江戸発の文化になります。交通網の整備は、江戸文化を全国に伝えます。五街道を通じて大名たちは参勤交代で、庶民は出稼ぎや旅行で全国に伝えます。浮世絵や番付、草紙などさまざまな出版物があり、それがまた綺麗で手軽で軽くて持ちやすかったことから、全国にお土産として広まっていきました。すると、江戸のファッションや風俗、習慣などが全国に伝わります。列島が同質化・一律化し一つの国・社会が出来上がってきます。他方、国学などの学問がこれを思想的に支えます。こうした一律化・一体化が、日本が近代になる際、欧米のような大変なエネルギーや犠牲を伴うことなく、江戸城は無血開城というかたちで達成させました。戊辰戦争として、上野で戦争があり東北諸藩が痛みますが、江戸はほぼ無傷のまま、近代に移行します。江戸でもし大戦争があったら、江戸が果たして近代の首都になったか分からないところです。

そういう形で見ると、江戸から今日の東京へ、さまざまなジグザグがありながら継続発展するという大きなストーリーが見えてきます。その過程で、鮎があり、天ぷらがあり、様々な神社仏閣ができたりと。そうした背景を知って、日本人や外国人が東京を観光し理解すると、この発展の未来がいろいろ構想できてくると思います。ある断片・情報に終わらず、全体の中でどういう位置にあるか。たとえば元禄時代は、上方中心の文化や経済でしたが、江戸は生類憐みの令のもと犬小屋が作られ。戦国の遺風をなくして、動物と共生する社会、人の命も大事にしていくという綱吉の政策が展開しています。ですから、さまざまな史実を江戸の発展の中で見る事も大切だと思います。

さて、委員の皆さんの話は、まだもうひとまわりできると思うんですけども時間がそろそろ迫ってきました。ここで今回の意見交換を終了したいと思います。活発に意見交換いただきありがとうございました。それでは進行を事務局へ戻します。

【事務局】

ありがとうございました。今後でございますが、本日、ご欠席の委員の皆様も含めましてご意見を伺いまして、年明けを目途に開催いたします第2回の懇談会で、さらに深掘りしていただきたいと存じております。

以上をもちまして、第1回「歴史・文化を軸にした東京の魅力発信に係る懇談会」を終了いたします。

本日の会議資料、議事録につきましては後日ホームページ上に公開いたします。

また、次回開催の具体的な日時等につきましては、事務局より追ってご連絡させていただきます。本日は誠にありがとうございました。